

玄宗「石台孝経」成立再考（続・二）

——書美の源を探る——

長尾 秀 則

一 はじめに

二 盛唐（玄宗の生きた時代）

三 盛唐の文化と「石台孝経」

四 隸書の変遷（三国時代から隋代まで）

五 隸書の変遷（唐代の名家とその書蹟）

六 魏隸にみる唐隸の基礎

七 結 言

完成した隸書である八分が最初に書道史上みられるのは、現在わかる範囲では、紀元前一世紀、前漢の武帝の時代である。その後、紀元後二世紀位まで、漢代の代表的書風としてこの書体は流行した。

唐代に書かれた「石台孝経」は、隸書作品として、唐隸を漢隸に比べ、数等下して評価する傾向があるためか、書格の面で漢隸に劣ると評されている。そして、誉めてもその豊麗さや、方整を言うのにとどまり、あまり高くは評価されていない。

本稿では、「石台孝経」の書美の源を探り、漢隸とはまったく書風が違う唐隸の基礎が、どのあたりにあるのかを究明した。そして、「石台孝経」が隸書の変遷史の中で重要な位置にあり、唐隸の代表的存在として、ここに漢隸の気品が無いとして捨て去るべき存在ではないことを明らかにした。

一 はじめに

前々稿、〈玄宗「石台孝経」成立再考（『京都語文』第六号所収）〉に於て、玄宗の閲歴と、その書の特質を探り、碑の形状を示し、建碑の理由を中心として考察を加え、「石台孝経」成立の一斑について管見を述べた。また前稿〈玄宗「石台孝経」成立再考（続・一）——文字資料の考察を中心に——（『京都語文』第八号所収）〉に於て、「石台孝経」一文字一文字についての細密な調査・研究を基に、この碑の成立に関連するいくつかの疑問の解決を試みた。本稿では、この碑の書美の源を探り、唐隸の基礎が、どのあたりにあるのかを究明したい。隸書の変遷史の中で、「石台孝経」がどのような位置にあるのかを探ったのが本稿である。

二 盛唐（玄宗の生きた時代）

玄宗（六八五〜七六二）は、垂拱一年（六八五）唐朝第五代皇帝睿宗の第三子として生まれた。姓は李、諱は隆基。初め楚王、ついで臨淄王に封ぜられた。

玄宗の生まれた頃は、第三代皇帝高宗の皇后、則天武后（六二三〜七〇五）が実権を握り、六九〇年には唐を滅ぼし周を興したが、高齢となり、ついに病んで、弘道一年

（六八三）に一度即位しながら、武后に廃された中宗が復位し、唐帝国の正統王朝が復活した（七〇五）。ところが、中宗の皇后である韋后がまた勢力を持つ。彼女はすべて武后をまね、政治にことごとく関与し、景龍四年（七一〇）ついに中宗との間に生まれ、才媛で韋后と共に勢力を持った安樂公主と共に共謀で、中宗を毒殺してしまう。

韋后は武后にならって、唐に代わって国を建てようとするが、この時、李隆基（玄宗）は自ら近衛軍団を指揮して宮中に攻め入り、韋后とその党派を討ち、韋氏らによる時代の混乱を平定した。

睿宗は、中宗の弟で、中宗が廃された後、一時帝位についているが、中宗と同じく武后によって廃されている。李隆基は、父であるこの睿宗を第五代皇帝として復位させ、自らは皇太子となり、やがて譲られて、先天一年（七一二）第六代皇帝の位に就いた。玄宗、時に二十八歳であった。これよりその治世は開元・天宝時代を通じ、四十四年にわたる。（在位七一二〜七五五年）

その前半にあたる開元年間（七一二〜七四一）は、善政が行われ、その年号により「開元の治」と称される。玄宗の即位当時は、武・韋両氏の専横時代を経て、各方面に欠陥が表われたが、彼はこれを刷新して内治外交に努めた。この頃、中心となって玄宗を補佐した宰相は、姚崇（六五

一〇七二二」と宗璟（六六三〇七三七）である。二人は則天武后の専權時代に、それぞれ下筆成章科（姚崇）と進士（宗璟）に合格している。姚崇は変化に対応することに長じ、宋璟は守成にすぐれていた。姚崇は、玄宗に武后時代以来の大綱十条を上言し、革新に取り組んだ。対外的には、突厥・吐蕃などの進出に対処するため、辺境地域に節度使を置いた。その結果、経済生活は安定し、治安は確保され、そして文化は爛熟した。大唐帝国の最盛期と認められる。

しかし、後半の天宝年間（七四二〇七五六）に至り、明君玄宗は急に政治に対する意欲を失う。平和と繁栄に酔いしれ、宰相の李林甫を信任して、安逸の日を送る。李林甫は陰險な宰相で、彼のために有能な政治家や軍人はことごとく斥けられ、政治は腐敗していく。そうした実態を玄宗は知らされることもないままに、李林甫は自己権勢の拡大を図るばかりであった。

こうして、政治に背を向けた玄宗は、道教を尊崇し、造営に財を費やし、楊貴妃との奢侈な生活に流されていったのである。李林甫に代わって、楊貴妃の従兄にあたる楊国忠を宰相に登用してからは、世の中は加速度的に退廃していく。均田制が崩れ、府兵制は乱れ、朝廷の内部も乱脈となる。加えて、楊貴妃に取り入って玄宗の信任を得、平盧・范陽河東の三鎮節度使を兼任するようになった安祿山

の存在は、やがて大唐帝国をもゆるがすこととなる。安祿山は、もともと外異民族の混血児で胡人と呼ばれる者であったが、大變勇猛で、しかも六ヶ国語を自由に話すことができたので、周囲の信望を集めた。玄宗と楊貴妃の前では自らを「雜胡」とへりくだって呼び、非常に肥満した体でありながら、軽やかに胡人の隣を踊ってみせたりしたという。

楊国忠は、この安祿山の動向を早くも察知し、玄宗に対して、安祿山が叛意を抱いている旨をしばしば奏したが、玄宗は信じなかった。そしてついに天宝一四年（七五五）安祿山は、姦臣楊国忠を除くという理由で、一五万の大軍を率い、北京を發つたのである。安祿山の軍は、洛陽・潼関を破って関中に侵入した。

玄宗は、乱を避けて長安から蜀（四川）に逃げようとしたが、途中で護衛軍の要求に屈し、楊国忠と楊貴妃を殺してやっと成都に落ちのびる。そして、玄宗は皇太子亨（肅宗）に讓位して上皇となった。

安祿山は、至徳一年（七五七）少子の後継者にしようとして、長子安慶緒と近臣のため殺された。この年の十二月、玄宗は蜀より長安に帰ったが、帝位をめぐる肅宗との関係が円満を欠き、悶々のうちに上元三年（七六二）崩じた。七十七歳であった。同じ頃、八年続いた大乱も、ついに平

定した。

三 盛唐の文化と「石台孝経」

平和と繁栄の上に文化の爛熟をみた玄宗の治世は、文化史上、どのような時代であつたかをみておきたい。

唐王朝では、書について述べれば、太宗が王羲之の書に傾倒し、初唐の三大家、歐陽詢（五五七～六四一）・虞世南（五五八～六三八）・褚遂良（五五八～六三八）の存在は無視できないが、天子の書は多く二王の書法を範としている。二王の書法といつても、主として範としたのは太宗の書であつたらしく、いずれも太宗の書によく似た書風である。

『宝刻類編』に収める唐代の宸翰及び諸王の書の作品数を示せば、以下の通りである。

太宗	5点
高宗	8点
武后	1点
中宗	1点
睿宗	1点
玄宗	33点
肅宗	3点
代宗	2点

徳宗 2点

相王旦（即睿宗） 7点

寧王憲 1点

慶王琬 1点

皇太子鴻 1点

皇太子紹（即肅宗更名字亨） 9点

棣王琰 1点

雍王（即徳宗） 1点

皇太子誦（即順宗） 8点

このように、『宝刻類編』に収められた玄宗の碑石類は、三十三もあり、最早その多くはみることが不可能だが、唐の諸帝王中では一番多い。このうち八分（隸書）十五種、行書七種、他は書体不明である。

玄宗の場合は、行書は、古くからの伝統を守り、王羲之風（太宗風）を守っているが、その趣味としては、隸書を最も好んだ。玄宗の開元時代には、これまでの伝統に真正面から反抗して、まったく新しい何ものかを創造しようとする革新派が台頭してきた。しかし、一方では二王を唯一の典型とし、これまでの伝統を守ろうとする保守派もありかなり複雑な様相を呈していた。その保守派を代表するのは李邕（六六八～七四七）があり、革新派としては、張旭（生没未詳）・顔真卿（七〇九～七八五）が名高い。

絵画では、世界帝国唐王朝を反映して、外来絵画の影響による表現形式の変化や、自律的發展の結果として新様式を生みだしていった。また、この時代は、仏教・道教・儒教が並立して行われており、寺院・道觀の建立は多かった。

それらの壁面を飾る絵画の制作は画家として最大の仕事であった。現存する壁画の中で、装飾的仏画の大画面形式による表現方法は、この時期に中国絵画史上最高潮に達したといわれる。しかも、こうした壁画には、山水画も取り入れており、新しい仏画形式が生まれている。人物画では、宮廷風俗画や仕女図が盛んになる。これらは、西域出土の美人風俗画等によって想像できるにすぎないが、粉飾を凝らした開元・天宝盛時の宮廷美人風俗を、流暢な墨線と豊かな彩色をもって再現している。豊頬肥満な美人の表情は、永泰公主墓の壁画に描かれたほっそりした型の美人像とは対照的で、この時代の一つの類型を追ったものではあるが、盛唐の爛熟した文化を象徴するような華麗さを示している。

彫刻は、仏教を尊重した則天武后の時代の造寺造仏の盛行が、玄宗の時代にもそのまま続いた。表現様式としては、肉体の写実化が進んだ上に、仏像の体つきは丸々とし、それを包む衣にも柔らかなふくらみが表現される。盛唐の仏像のように肥満したつくりは、当時の土偶にもよく表われ

ている。大きな髻^{ももぢり}、ゆつたりとした衣服、腹部を前に突き出した立ち姿の女子俑は、当時の造像精神を反映したものである。こうした特徴は、前述した宮廷美人風俗画とも共通している。

工芸では、金属工芸がこの時代最も名高い。鑑鏡は、その器形が多様であると共に、鏡背裝飾が華麗である。文様を鑄造で表わしたものの他、銀板を貼って打出文様、線刻文様を施したもの、金銀平脱の技法を用いたもの、螺鈿で飾ったものなどがある。染織工芸は種類が豊富で、その技巧はいずれも極めてすぐれ、材質の持つ特色を遺憾なく發揮している。色彩の豊富なことも唐代染色工芸の特色である。金属工芸・染色工芸とも、唐代初期にはイラン系の技法と文様の著しい流入がみられるが盛唐頃から絵画風の、或いは艶麗な情趣が色濃くなることがほぼ認められる。

陶磁工芸品中特記すべきものとしては、唐三彩がある。

ごく軟らかい陶胎に低火度の三彩釉がかかっているだけの唐三彩は、日常使用には耐えない。器形は多種多様であるが、三彩釉の使用によって絢爛たる趣きを表わしている。鳥獣人物像は生氣に富み、器物の類は特に豪華な彩色がなされ、当代工芸中最も興味深いものの一つになっている。

このようにみえてくると、盛唐の文化は、当時の貴族を基盤とする社会体制が、しだいに崩壊に向かいつつあり、書

ばかりでなく、文化のあらゆる方面に、ようやく革新の風が吹きはじめてきている。特に、盛唐の美術は、シルクロードを通して流入した外来文化を消化し、独自の文化として開花させている。その土台となったのは、社会の安定繁栄であり、その結果もたらされた宮廷生活の華やかさが、この時代の文化形成に大きく反映されている。中でも盛唐の美人像に代表されるふくよかさ、豊かな体つきは、この時代の象徴と言えよう。そして、こうした時代の象徴が、人間の表現の上に大きく表われるという点からみれば、盛唐という時代は、人間性の主張が強くなりつつあった時代ということができよう。

玄宗の好尚も、この時代の流れの中にあり、盛唐を象徴するような、豊麗な唐隷を残したのである。また「石台孝経」の碑身の下に正方形の石の台が三層あり、石台三層は、四面とも線刻の紋様で装飾され、唐代流行の蔓草と瑞獸が陽刻されている。生い茂る蔓草と雄渾な獅子の姿をした瑞獸、この二種の植物・動物を細長い一面にバランス良く布置し、調和させることは本来難しいことと思われる。しかし、刻者は、蔓草を風が吹き雲が湧き起こるかのようにより、由に抑揚をつけて描いており、両者は画面において融合調和しているばかりか、かえって瑞獸の威勢が際立ち、全体の構造は見る人に力強さや躍動感を感じさせている。玄宗

自らがこの線刻をしたとは考えられないが、「石台孝経」は、彫刻的にも盛唐の芸術の精華を表わしている碑なのである。（『京都語文』第六号、一五九頁の瑞獸を参照）

四 隸書の変遷（三国時代から隋代まで）

完成した隸書である八分（波勢・波磔を備え、古隸とは異なる流麗さをもった隸書）が最初に書道史上みられるのは、現在わかる範囲では、紀元前一世紀、前漢の武帝の時代である。その後、紀元後二世紀位まで、漢代の代表的書風としてこの書体は流行した。

唐代に書かれた「石台孝経」は、隸書作品としての芸術的評価はあまり高いものではなく、唐隷を漢隷に比べ、数等下して評価する傾向があるためか、書格の面で漢隷に劣ると評されている。そして、誉めてもその豊麗さや、方整を言うのにとどまり、絶賛はされていない。

玄宗の書いた隸書作品のうち、最も高い評価を受け、代表作とみられているのは、「紀太山銘」⁽³⁾（七二六）である。

「紀太山銘」は山東泰山の東嶽廟後の南面の石崖に刻された摩崖碑。高さ二丈六尺、広さ一丈五尺、二十四行、行五十一字。字形十四センチメートル前後に及ぶ大字である。

『弇州山人稿』・『竹雲題跋』・『曝書亭集』・『来齋金石考略』・『授堂金石跋』・『山左金石志』・『泰山道里記』等、著

録されているものも少なくない。玄宗の代表作とみられるばかりでなく、唐隷中最も異彩ある秀作とされる。しかし、確かに「強さ」という面では、「石台孝経」より上かもしれないが、これは、字形の大きさ、摩崖碑として刻されているためと私は解する。そして文字としての完成度、文字数、歴史的価値から言っても、「石台孝経」を玄宗の代表作、唐隷の代表作とみてまちがいはないと断言したい。

さて、ここでは、漢代に完成した隷書が、なぜ、どのようにして唐隷のような姿に変わったのかをみてみたい。隷書完成後、三国から唐までの隷書碑のいくつかを年代順に追ってみよう。

三国時代になると、漢以来の篆隷と、草・行・楷の新書体が雑然と併せ用いられた。普通の文書や手紙文は新書体で書かれ、儀式ばつたものや改まったものには古い篆隷が用いられていた。

魏の「公卿上尊号奏」(二二〇)や「受禅碑」(二二〇)等を見ると、漢隷にみえる滑らかな線の流れが消え、堅い感じを受ける。字形はほぼ正方形で角張った構成をしており、筆法は隷書だが、楷書にやや近付いたようにみえる。

「大將軍曹真殘碑」(二三五〜二三六)では、隷書の筆法がより鮮明に表われているが、漢代の「曹全碑」にみられるような流麗さではなく、形式ばっている様子が著しい。

ただし、「石台孝経」の書風によく似ている点も多くみられる。

西晋に入り「皇室三臨辟雍碑」(二七八)になると、筆法に楷書の特徴が強く表われてくる。起筆を露鋒にしてしっかりと打ちつけたり、横画を右上がりにする部分が処々にみられる。逆に言えば、漢代の代表的隷書の筆法がかなり崩壊している。晋隷の代表作とされる「徐夫人苕洛墓碑」

(二九一)・「成晃墓碑」(二九一)・「張朗墓碑」(三〇〇)

等の墓碑をみると、少し軽快な用筆となつて、魏隷ほどの堅苦しさがなくなる。その分だけ、より楷書の風に近くなるので、波磔や逆入の技法が、そこだけ隷書から取つて来て楷書に付けたような不自然さがある。なお、この頃の諸碑には、「石台孝経」に特有の結体がみられる。「イ」や「八」の第一画めの「フ」のような形の点、「也」を「也」と作るところ、「ふ」と外側へはね出す左右点など多数あるが、これは漢隷にはみられなかった結体である。

「石鈔墓誌」(三〇八)をみると、前の墓碑とはやや趣が異なつてみえる。「石台孝経」に近い印象を受けるのは、字形がやや扁平になり、行間よりも字間を空けているためである。波磔も伸び、美しい。ただし、波磔の起筆は楷書的であり、逆入していないため、やや波磔は強さに欠ける。楷書の隷書ながら、品位、文字バランス、自然さは進歩し

ている。

東晋の「爨宝子碑」⁽¹³⁾（四〇五）・「爨龍顏碑」⁽¹⁴⁾（四五八）

は、共に楷書であるが、隸書の波磔のようなものがみられる。しかし、これは「龍門造像記」にもみられるように、終筆に力を加えて上方へ押し上げた感じで、波勢は感じられない。あくまでも楷書の中の装飾の一部とみなされるべきであろう。

北周の「西嶽華山神廟碑」⁽¹⁵⁾（五六七）は、楷書と隸書の混合した碑で、これを書体としてどう呼んで良いか疑問である。このような碑が存在したこともまた現実であり、隸書の筆法が混乱していると言うこともできるであろう。

隋の墓誌銘へ参考①参照は、魏隸に似た書風が多くみられる。楷書に近い隸書という点では魏と同じであるが、墓誌銘全体の統一感はずいぶん一歩進んだのではないだろうか。魏隸に比べ安定感が増している。これは隸書と楷書がある程度溶け合い、一定の書風に落ち着いたからとみることも可能であろう。ただし、次の初唐の三大家の出現の目録であることを考え合わせれば、楷法の極則への道のりが、隸書にも大きく影響し、整正化したとみるのが妥当と考えられる。また、この時期ともなると、さすがに「石台孝経」の書風とよく似た結構の文字が多くなっている。

ここまで述べてきて、改めて気付かされるのは、隸書の作品は隋代までかなりの数が残されているわけだが、隸書（八分）の名家が出現していない点である。これは、隸書の名家が不現であったわけではなく、その名がほとんど伝わらなかったのである。唐以前の石刻の類には、書者名を署したものが極めて少なく、唐代以降は、撰文・書者ともに碑に題することが多くなる。又、書者の署名が無くてもこれを推定することが可能な場合が多いのである。これは書論にも影響し、時代と書品のみを叙述していたものに、書者が加えられたのである。

なお、隸書には古隸と八分とがあり、古隸は前漢の素朴な刻石にみられ、波磔が発達していない。これに対し、八分は波磔を備えた隸法の書体で、後漢の桓靈二帝を中心とした時期に名作が集中している。中には書者の名の記されているものもある。漢隸の代表作について今回は詳述しないが、この点はおさえておくべきであろう。

また、もう一点不思議に思うのは、書聖、王羲之⁽¹⁾に隸書の名作が伝わっていない点である。もちろん王羲之は、隸書でも高い評価を受けており、章草は残っている。今後の課題としたい。

五 隸書の変遷（唐代の名家とその書蹟）

初唐の三大家のうち、欧陽詢（五五七～六四一）は、正書（楷書）の大家であるが、隸書（八分）もよくした。

『宝刻類編』にみえる隸書作品は、次の通りである。

兵部尚書段文振碑（六一二）

司空竇抗墓誌（六一二）

宗聖觀碑（六二四）

司空杜如晦碑（六三〇）

徐州都督房彦謙碑并陰（六三一）

昭陵刻石文（六三六）

昭陵六馬贊（六三六）

楚哀王稚詮碑（不明）

欧陽詢の書いた碑のうち、隸書（八分）のものが過半を占めているのをもて、欧が楷書に劣らぬ力を隸書で示していたことがわかる。しかし、現存するのは「宗聖觀碑」・「房彦謙碑」の二碑のみである。また、この二碑も文字の磨滅したものが多く、本来の姿は示していない点が残念であるが、彼の隸書がどのようなものであったかを知るには十分である。右肩を少し上げた緊密な結構や、横画・波法に峻峭な点がみえ、欧陽詢の隸書に楷書の結構法がかなり影響している点は、唐隸の一例として特徴をよく示して

いると言えよう。しかし、「石台孝經」とはまったく書風が違う。唐隸といっても、初唐と盛唐ではかなりの違いがあることを示す好例である。

そして、後世への影響という点でみれば、欧陽詢の隸書は、楷書ほど影響せず、玄宗の隸書は、開元・天宝の書道界に大きく影響した。これはやはり、立場の違いが大きいと思われる。

欧陽詢・玄宗以外で、唐代隸書で名のあるものに、盧藏用・田義暉・韓择木・蔡有鄰・梁昇卿・史惟則・張廷珪等がいる。

ここで一つ注目しておきたい点がある。それは、起筆の部分である。欧陽詢は評価としては、隸書（八分）も評価されており、彼らしい隸書であると私も評価するが、隸法の起筆が今一つ明確でない。つまり、逆入の筆法が不明確で、そのため波発部分が、かなりもの足りない表現になっている。しかし、玄宗及び、それ以降の書家の表現は違う。

玄宗は、起筆の逆入の筆法が隸書の要諦であることを悟っている。ほとんどすべての点画で逆入の起筆を実行している。よって、波発も強く自然で、波勢も自然、全体としてバランスの良い字になっている。そして、玄宗以降の隸書の名家は、玄宗が再発見した隸法の要諦を守っているにすぎないように私には思える。

六 魏隸にみる唐隸の基礎

前二項では、隸書の諸碑を時代を追ってみてきた。「石台孝經」の基礎、広く言えば、唐隸の基礎は、どのあたりにあると言えるのであろうか。

一般的に考えて、時代が下るにつれ、徐々に漢隸の特徴が消え、唐隸の特徴が表われてくるものと予測する人は、多いであろう。しかし、意外にも、かなり早い時期に「石台孝經」とよく似た書風の碑が存在する。盛唐から五〇〇年もさかのぼった、魏の「曹真残碑」(二三五—二三六)である。(参考②参照)線の豊麗さという点では、「石台孝經」の方が太めの線であるが、その骨法は、同じとみてよいのではないだろうか。つまり、唐隸は徐々に形成されたものではなく、過去のこのあたりの書風に範を求め、それを基礎として時代の好尚を加味して意識的に造形したものと考えられる。

玄宗は、『孝經』のテキストを正すと同時に、隸書の書体をも正したのである。唐代ではもはや一部でしか用いられなくなった隸書で書いたのは、時代と共に楷書化して崩れてきた隸法を蘇生させるためでもあった。そのため、敢えて近い時代の隸書(隋の墓誌銘中にみられるようなもの)を避けて、もっと古い隸法を求めたのだと思われる。

北宋の『宣和書譜』に、

初め翰苑の書體の世習に狃おどろふを見て、銳意、章草・八分を作り、遂に舊學を擺脫はいたす。

とあるように、開元・天宝当時、世間に流行していた院体風の俗流にあきたらず、努力して章草(隸書の早書き)・八分(隸書)を書き、沈滞していた伝統から抜き出ようとしたという基本姿勢はあったにしても、漢隸のままの表現では、もはや時代の好尚に合わず、皇帝としてのブライドもあり、自らの隸書を作る必要が玄宗にはあったと考える。玄宗が「漢隸」をどのように受けとめ、どの程度参考にしたか、またそれが可能であったかどうかは興味のある点であるが、書風が「漢隸」と「唐隸」でまったく違う結果からみて、将来への課題としておきたい。

「石台孝經」の基礎は、「曹真残碑」、或いはこれと同時代の「魏隸」であった。「曹真残碑」をみると、漢隸の波勢がもはや自然のものではなく、「法」として意識されなければならなくなっている。見方によっては不自然で格調の低い書と言えるかもしれない。しかし、逆に言えば、隸書の筆法とはどのようなかを明確に示し始めた作品がこの「曹真残碑」あたりの魏隸であったのであろう。玄宗はここに目をつけ、この碑あたりの隸書から「法」を学び取って唐の新しい隸書を造形したのである。豊麗は、盛唐

という時代の風気の影響であり、方整は、楷書全盛の時代の風気の影響するところと解すべきであらう。

九 結 言

本稿では、「石台孝経」の書美の源を探り、漢隸とはまったく書風が違ふ唐隸の基礎が、どのあたりにあるかを究明した。

玄宗は、行書においては、王羲之の影響を受け、太宗の行書の流れをくんでいる。隸書においては、結体用筆とも魏隸の法と共通する部分が多く、その骨法に、魏の「曹真残碑」、或いはこれと同時代の魏隸が基礎になつていゝと考える。少なくとも「石台孝経」に代表される唐隸は、書体変遷の中で自然発生的に生まれたものではなく意識をもつて造形された点は確認できたと言えよう。

魏・晋の墓誌銘にみえた隸・楷の移行期の書体は、さほど「法」を意識した様子はない。一つの墓誌銘中でさえも書体・書風の統一が不完全であることから、それがよくわかる。この時代こそ、隸書が混乱し、技法が乱れた時代である。これに対し、玄宗の隸書は、先人の残した隸法をよく研究し、知り尽くした上で、新たに時代の好尚を加えて作り出したものである。「石台孝経」は、先人の書、特に魏隸を学んで再構成したものであり、この時代における

隸書研究の集大成とみて良い。

玄宗は、楷書中心の時代に隸書の価値を問い直し、規範を求めたが、もはや崩壊していたため、自らその範を作つたものと考えられる。これは、『字統』を作らせ、後世の人に隸書の範式を示そうとした姿勢や、『孝経』や『老子道德経』の注を自ら行つたのと同じ姿勢である。「石台孝経」は唐隸の代表的存在として、ここに漢隸の気品が無いとして捨て去るべき存在ではないことは、明言したい。

注

(1) 篆書から派生した書体で、特に漢代に盛行した隸書は波磔はたつの有無により古隸と八分に分かれる。古隸とは波磔がなく、線質は直線的なため素朴な感じがする。八分とは横画の終筆部分に波磔のあるもので、隸書といえは一般的に八分隸をさす。

(2) 楊貴妃入内の経緯は『唐書』巻七十六、后妃伝上、楊貴妃の条に詳しい。

(3) 文字は八分、豊潤にして雄逸、帝王の気象をそなえた堂々たる姿である。上部中央に「紀泰山銘」の額、左右に蟠竜雲文を陰刻、碑文の下縁に雲文、中央左右に飛天の像を現わしている。

(4) 書体は、隸書(楷書)のほか、行、草、章草、飛白、八分

すべてこれをよくし、みな入神の境に至った。

- (5) 隸書の点画が簡略化され、終筆を太く短く波勢のように撥ねるもの。

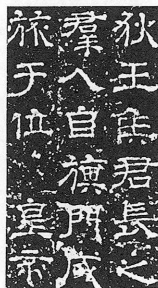
- (6) 「上尊号奏」。

魏の曹丕（文帝、二〇四～二三九）の臣下の公卿將軍らが、丕に即位を奨めた上奏文を魏の黄初元年（二二〇）に刻したもの。碑の陽陰に三二行・行四九字。河南許昌にあり書者は鍾繇の説がある。



- (7)

「受禪表」ともいう。魏の文帝が漢の献帝から禪讓をうけて帝位についたことを記した碑。黄初元年（二二〇）の刻。河南許昌にあり、上尊号と同じく三二行・行四九字。書者も同一と推定される。

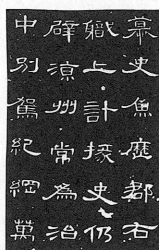


- (8)

「曹真残碑」。魏の大將軍曹真の頌德碑でその任地長安に建碑。清・道光年間（一八二一～一八五〇）に西安から出土したという。残欠して紀年は不明だが青龍三、四年（二三五～二三六）ころの刻と推定。

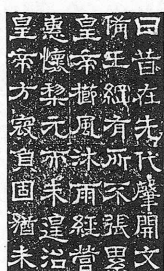
- (9)

陝西省邵陽県長曹全の頌德碑。万曆（一五七三～一六一九）の初めごろ出土。筆勢はよどみなく清らかに澄み、行届いた感覚の働きの中に優しく若々しい婉麗さがある。八分隸の頂点に達したものと言える。漢王朝中央文化を象徴した最後のものとして著名。



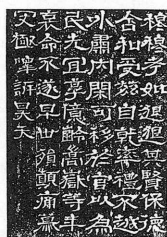
- (10)

近年洛陽で出土。文字は完好。晋の帝位についた司馬炎、世祖武帝は礼教を尊重し、辟雍すなわち大学に三度も行幸し、教学の隆盛をはかった。その頌德碑。咸寧四年（二七八）の立碑。



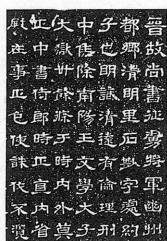
(11) 「張朗碑」。この碑は洛陽（河南省）より出土し、のちわが

国に運ばれ、大倉集古館に蔵されたが、大正の震災で破砕した。五五×二七センチの小さなもので、一九行・行一九字で銘文は碑陰に刻されている。墓中に入れられたもので、墓碑でなく、墓誌銘にあたる。晋の永康元年（三〇〇）の刻。



(12) 西晋・永嘉二年（三〇八）に葬られた石鈔の墓誌銘。四面

刻の墓碣。四六×二二五。書体移行期の誌としては長文で、資料の少ない時代だけに貴重。清楚・端正な書で、漢隸の古意を存する。河南洛陽出土。



(13) 東晋・義熙元年（四〇五）。東晋安帝の時代の刻で、乾隆

の四三年に初めて世に出た。書風は隸より楷への過渡期のもので雄偉險勁。爨龍顏碑と書風も近く、「二爨」の碑と尊ばれている。



(14) 爨氏は西南夷の豪族。爨龍顔は字を仕徳といい、劉宋に仕

えて寧州刺史となり、元嘉二十三年（四四六）に歿し、大明二年（四五八）にこの墓碑が一族によって造られた。野趣をおびた書風で、異体字、俗字が多い。



(15) 華嶽頌。楷書とも隸書ともみられ、両者の筆法が混合して

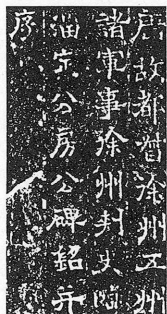
いる。文は万紐于瑾。書は趙文淵。北魏分裂以後の北朝書の風姿を今に伝える代表的なもの。



(16) 「宗聖觀記碑」。唐の武徳九年（六二六）の刻。陳叔達撰銘。歐陽詢撰序ならびに書。隸書二三行・行六〇字。詢の隸書碑はこれと「房彦謙」と二碑あるのみで、珍賞するに足る。



(17) 唐の貞観五年（六三二）の刻、李白葉撰、歐陽詢の書。隸書三六行・行七八字。山東章邱縣趙山に現存する。


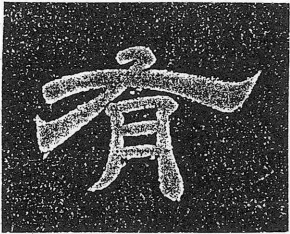



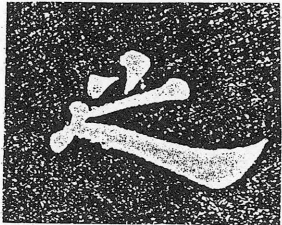


〈参考①〉隋の墓誌銘の一例

○楊德基誌（六〇八）

君諱施字匠仁其先弘農人也元祖秦白神
人之苗漢太尉楊崇之後三台者八葉九隸
十重方伯內來不泄言論祖實魏驃騎將軍
齊州刺史父安子魏驃驃將軍東郡太守並
有善政之歌俱揚青施之頌君秉靈河岳降
施呈晨多習先風長堪入則洛陽令鄭公以
君青望施顯名任通閭鄉正撫大接小莫不
歌稱君體遠空有之義心遊不二之門大隋
勅使巡幸蒙詔板授趙滋鉅鹿縣令未盡
順渠之力仙鶴言孝春秋十有三歲大業四
季十月十二日遘疾通閭鄉第粵以其月廿
一日遷葬於鴉州城東北卽山之原榮料
四里勒銘玄壤而作頌云

〔付記〕本稿は、平成十五年度国内研修による成果である。

	曹真殘碑	石台孝經	
有			有
為			為
之			之

〈參考②〉「石台孝經」と「曹真殘碑」の比較例